

集団における幼児の対人行動特徴

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川崎, 理恵 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4525 |

集団における幼児の対人行動特徴

川崎 理恵

森心会 国分病院

要約

本研究は、幼児の社会的スキルと対人行動の関連を遊びへの参加の仕方に着目して検討することを目的とした。研究対象は幼稚園年長児6名であり、行動目録法と自然観察法による自由遊び場面での行動観察を行ったところ、次の結果が得られた。幼児の対人行動は『孤立行動』、『間接的対人行動』、『注意喚起行動』、『積極的対人行動』の4つに分類される。幼児がそれらの内どの行動をよくとるかによって、『積極的』、『受身的』、『孤立』の3タイプに分けられる。積極的児及び受身的児は、連合遊びや協同遊びを長時間行うことが多く、孤立児は1人遊びを中心に短時間ごとに遊びの内容が変わる。また、積極的児と孤立児は自らの興味の方向に動くという時点では共通した行動をとるが、積極的児は仲間を誘って協同遊びに発展させることができる。受身的児は他児の行動を観察し、協同遊びや連合遊びに参加していくことができる。3タイプの遊びへの参加の仕方から、『自己主張』、『他者の行動を観察する』、『自分に注意を向ける』、『他者の模倣をする』、『協調する』の5つの社会的スキルが遊びの参加の仕方に関連することが考察された。

キーワード：社会的スキル、対人行動、幼児期、遊び

I 問題と目的

幼児期や児童期における社会的スキルが、その後の生活課題における行動の適応や発達に関連していることがいくつかの研究で明らかにされている。中澤(2000)は、幼児期や児童期において非社会的行動を多く持つ子どもは、青年期において鬱や自尊心の低下が生じる等の内在的問題行動と繋がるリスクを持つと指摘している。また、近年は核家族化、きょうだいの減少、地域社会の崩壊といった子育て環境の変化の中で、子どもの仲間関係が希薄化しているという。これらのことから、子どもの社会的スキルについて積極的な状況の理解と支援が必要であると考えられる。一方で、幼児期は同年代の仲間と関わることが少しずつ出来るようになってくる時期であり、その発達は子どもの月齢や育つ環境によって異なる。認知の仕方も大人とは異なる点があり、問題となる幼児の行動特徴を捉えるためには、幼児が獲得している社会的スキルと対人行動の特徴についてまずは実態を把握する必要があると考えられる。本研究では、

自由保育の時間に発生した幼児の自発的行動を観察し、幼児の社会的スキルと対人行動の関連について、幼児の活動の中心となる遊びへの参加の仕方に着目して検討することを目的とした。

II 方法

1. 調査時期

調査は2013年6月から9月までの途中に園の夏休みを挟む4か月間で、6回実施された。

2. 調査対象児

大阪府内にある幼稚園年長児6名（男児4名、女児2名、年齢は5歳）である。観察日数については、調査対象児が園を休む日があったため、6名の観察日数は同じではなかった。

以下の表1は、対象児の調査参加状況を示す。

3. 行動観察の手続き

ビデオによる観察と筆者による直接観察の2つの方法を用いた。直接観察では、自然観察法で幼児の発言や表情などを記録した。ビデオによる観察は、1人の幼児につき1日5分間の観察を行っ

表1. 調査対象児の観察参加状況

| 観察日/対象児 | A | B | C | D | E | F |
|---------|---|---|---|---|---|---|
| 6月10日 | 欠 | 出 | 出 | 出 | 出 | 出 |
| 6月17日 | 欠 | 欠 | 出 | 出 | 出 | 出 |
| 6月24日 | 出 | 出 | 出 | 出 | 欠 | 出 |
| 7月1日 | 出 | 欠 | 出 | 欠 | 出 | 出 |
| 9月9日 | 欠 | 出 | 出 | 出 | 出 | 出 |
| 9月17日 | 欠 | 出 | 出 | 出 | 出 | 出 |

※「欠」は当日欠席またはビデオ不備、「出」は当日出席であったことを指す。

た。撮影場所は、園庭、保育室、多目的室、図書スペースであった。撮影時間は、自由保育と設定されている時間に行った。ビデオは研究以外の目的には使用せず、プライバシーには厳重に配慮した。ビデオの映像については、次の方法で記録及び分析を行った。①2名の評定者がビデオで確認できる幼児の行動から、頻出する行動を抽出し、行動チェックリストを作成した。②行動チェックリストを用いて再度ビデオを観察し、行動目録法により幼児の行動を記録した。③10秒を1インターバルとして、5分間の幼児の行動を記録し、Parten (1932) の遊びの分類基準を用いて分類した。記録は、最も撮影日数が少ない幼児に合わせて、1人の幼児につき2日分(5分×2日分、計10分)とした。使用した分類基準は、表2の通りである。

III 結果と考察

1. 行動チェックリストの作成

観察した内容から作成された行動チェックリストは表3に示す14の項目になった。

表2. Parten の遊びの分類基準

| カテゴリー | 定義 |
|------------|--|
| 1. あてのない行動 | 同じ場所に立っているなど、外界への働きかけがない。または作戦的でない行動をずっと行っている。 |
| 2. 傍観的行動 | 他児の遊ぶ様子に関心を持って見るが、参加はしない。 |
| 3.1 人遊び | 近くに他児がいても無関係で、1人で遊んでいる。 |
| 4. 並行遊び | 近くにいる他児と同じような遊びをしているが、それぞれ独立して遊んでいる。 |
| 5. 連合遊び | 他児と一緒に遊び、やりとりも見られるが組織化されていない。 |
| 6. 協同遊び | 組織化されたグループで、役割をもって協力しながら遊ぶ。遊びを統率するリーダーがいる。 |

チェックリストの項目について、Ward法を用いて階層クラスター分析を行ったところ、4つのクラスターができた。分析に用いた数値は、調査対象児ごとに観察日数を分母とした平均値を用いた。第1のクラスターは、『1人でプラプラ歩く』、『1人で遊ぶ』、『周囲と関わりを持たない』、『視点が定まりにくい』の4項目である。周囲への働きかけを行わないという共通の特徴から、このクラスターを「孤立行動」と命名した。第2のクラスターは、『保育者への働きかけ』『攻撃的な行動』『友達についていく』の3項目であり、間接的に他者との関わりを持てていることから、『間接的対人行動』と命名した。第3のクラスターは、『保育者から言葉をかけられる』、『歓声など大きな声を出す』の2項目であり、他者からの働きかけを喚起させることから『注意喚起行動』と命名した。第4のクラスターは、『仲間と遊ぶ』、『幼児同士の身体的接触』、『仲間への接近』、『表情の変化』、『10m以上移動する』の5項目であり、積極的に行動し人と関わっていく傾向が強いことから「積極的対人行動」と命名した。幼児の対人行動には、孤立行動、間接的対人行動、注意喚起行動、積極的対人行動の4つがあると考えられた。

次に、調査協力児間で行動傾向の差を捉えるために、行動目録法で記録された行動について、Ward法による階層クラスター分析を行ったところ、3つのクラスターができた。

第1クラスターのD, Fは、積極的に他者と関わり、行動範囲を広げていく行動が多いことから、この群を「積極的児」と命名した。第2クラスターのB, C, Fは、他者からの働きかけを喚起することや、他児についていくなど間接的に人と関わる傾向が強いことから、この群を「受身的児」と命名した。第3クラスターのAは、他児への働きかけが見られず、1人で行動することが多かったことから、この群を「孤立児」と命名した。クラスターごとに、観察された対人行動の量をグラフ化すると図3になる。

表3. 行動チェックリスト

| カテゴリー | 行動 | 意味及び具体例 |
|---------|---------------|--|
| 孤立行動 | 1人でブラブラと歩く | 移動目的でなく、1人で歩き回っている |
| | 1人で遊ぶ | 周囲に他の幼児がいる状況で、周囲と関わりを持たず1人で遊んでいる |
| | 周囲と関わりを持たない | 1回の観察を通して、周囲の幼児が観察対象児を遊びに誘うなどの働きかけが一切見られない |
| | 視点が定まりにくい | 目的なく視点がキヨロキヨロと動き、1つの場所に定まらない。何を見るでもなくぼんやりしている。 |
| 間接的対人行動 | 保育者への働きかけ | 保育者に対し何かを話しかけたり、意図的に身体接触をする |
| | 攻撃的な行動 | 叩いたり、遠くから悪口を言うなど、攻撃的な行動を介して他者と関わろうとする |
| | 友達についていく | 他の幼児の後について遊びに参加したり、行動を真似る |
| 注意喚起行動 | 保育者から言葉をかけられる | 集団に向けてではなく個人に向けて、保育者から何か言葉かけをされる |
| | 歓声などの大きな声を出す | 歓声などの大声を上げることで、本人の意図に関わらず他の者の注意をひく |
| 積極的対人行動 | 仲間と遊ぶ | 他の幼児と一緒に同じ遊びをする |
| | 幼児同士の身体的接触 | 肩を叩いたり、抱きついたりなど、攻撃的でない形での身体接触によってコミュニケーションをとる |
| | 仲間への接近 | 他の幼児の近くへ意図的に接近する |
| | 表情の変化 | 嬉しさや驚きなどの感情を表情で表現する |
| | 10m以上移動する | 目的を持って10m以上の移動をする。空間を大きく使って遊ぶ。 |

| | 0 | | 5 | | 10 | | 15 | | 20 | | 25 | |
|---------------|---|--|---|--|----|--|----|--|----|--|----|--|
| 仲間と遊ぶ | | | | | | | | | | | | |
| 幼児同士の身体的接触 | | | | | | | | | | | | |
| 仲間への接近 | | | | | | | | | | | | |
| 表情の変化 | | | | | | | | | | | | |
| 10m以上移動する | | | | | | | | | | | | |
| 1人でブラブラと歩く | | | | | | | | | | | | |
| 周囲と関わりを持たない | | | | | | | | | | | | |
| 1人で遊ぶ | | | | | | | | | | | | |
| 視点が定まりにくい | | | | | | | | | | | | |
| 保育者から言葉をかけられる | | | | | | | | | | | | |
| 歓声など大きな声を出す | | | | | | | | | | | | |
| 保育者への働きかけ | | | | | | | | | | | | |
| 攻撃的な行動 | | | | | | | | | | | | |
| 友達についていく | | | | | | | | | | | | |

図1. チェックリスト項目の階層クラスター分析結果

| | 0 | | 5 | | 10 | | 15 | | 20 | | 25 | |
|------|---|--|---|--|----|--|----|--|----|--|----|--|
| 幼児 D | | | | | | | | | | | | |
| 幼児 F | | | | | | | | | | | | |
| 幼児 B | | | | | | | | | | | | |
| 幼児 E | | | | | | | | | | | | |
| 幼児 C | | | | | | | | | | | | |
| 幼児 A | | | | | | | | | | | | |

図2. 対象児ごとに行動をクラスター分析した結果

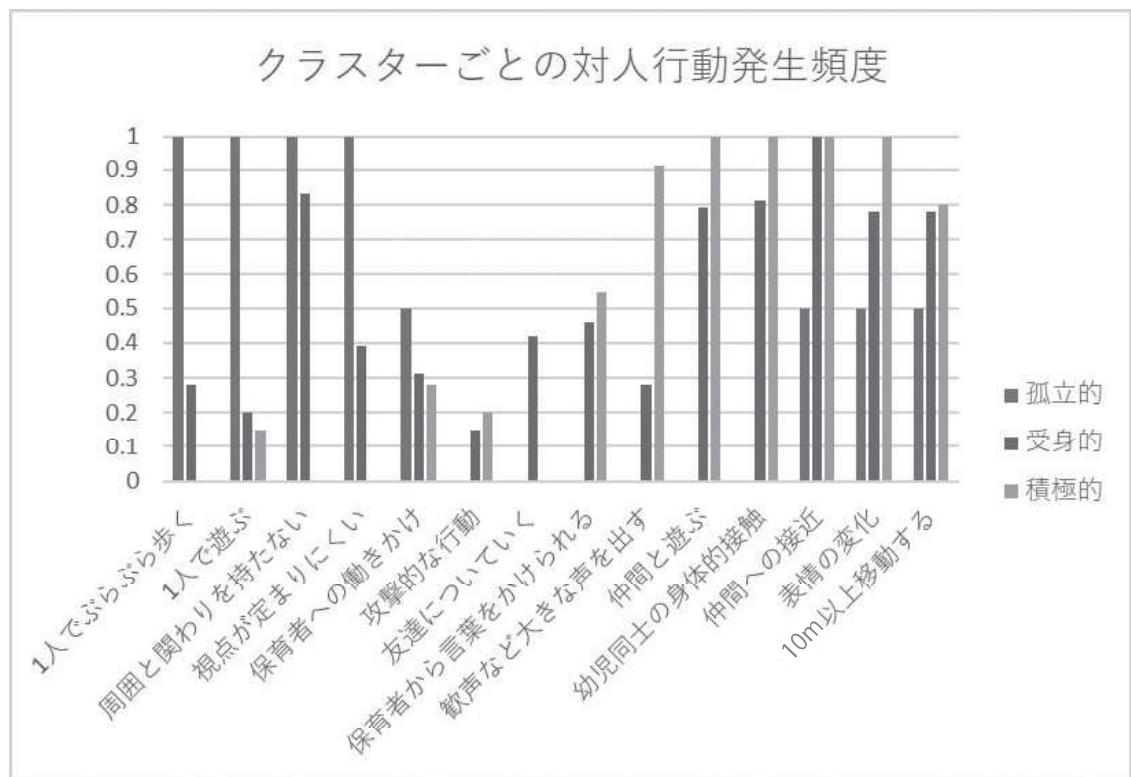


図3. クラスターごとの対人行動の発生頻度

表 4. Parten (1932) 分類基準による遊びの分類

| 対象児/インターバル | 積極的児 | | | | 受身的児 | | | | | 孤立児 | | | | |
|------------|------|------|------|------|-------|------|------|------|------|------|---------|---------|--|--|
| | D1 | D2 | F1 | F2 | B1 | B2 | C1 | C2 | E1 | E2 | A1 | A2 | | |
| 1 | 協同遊び | 連合遊び | 連合遊び | 連合遊び | 並行遊び | 連合遊び | 連合遊び | 連合遊び | 連合遊び | 1人遊び | あてのない行動 | あてのない行動 | | |
| 2 | | | | | | | | | | | | | | |
| 3 | | 協同遊び | | | その他 | | | | | 連合遊び | 1人遊び | 1人遊び | | |
| 4 | | | | | | | | | | | あてのない行動 | あてのない行動 | | |
| 5 | | その他 | | | | | | | | | | | | |
| 6 | | | | | 傍観的行動 | | | | | | | | | |
| 7 | | 1人遊び | | | その他 | | | | | | 1人遊び | その他 | | |
| 8 | | | | | | | | | | | | | | |
| 9 | | 協同遊び | | | | | | | | | あてのない行動 | あてのない行動 | | |
| 10 | | | | | 1人遊び | | | | | | | | | |
| 11 | | その他 | | | | | | | | | 1人遊び | その他 | | |
| 12 | | | | | | | | | | | | | | |
| 13 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | あてのない行動 | | |
| 14 | | | | | | | | | | | | | | |
| 15 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | 1人遊び | | |
| 16 | | | | | | | | | | | | | | |
| 17 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | その他 | | |
| 18 | | | | | | | | | | | | | | |
| 19 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | あてのない行動 | | |
| 20 | | | | | | | | | | | | | | |
| 21 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | 1人遊び | | |
| 22 | | | | | | | | | | | | | | |
| 23 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | その他 | | |
| 24 | | | | | | | | | | | | | | |
| 25 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | 1人遊び | | |
| 26 | | | | | | | | | | | | | | |
| 27 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | 1人遊び | | |
| 28 | | | | | | | | | | | | | | |
| 29 | | 連合遊び | | | | | | | | | 1人遊び | 1人遊び | | |
| 30 | | | | | | | | | | | | | | |

2. 対人行動傾向と参加する遊びの分類との関連

10秒を1インターバルとして、5分間の幼児の行動を記録し、遊びの分類基準に当てはめた結果が表4である。

この表から、積極的児と受身的児は協同遊び及び連合遊びをしていることが多い、孤立児は1人遊び及びあてのない行動をしていることが多いと分かった。また、傍観的行動と並行遊びは受身的児のみに観察された。

行動観察の結果から、積極的児、受身的児は連合遊びや協同遊びなど同じ遊びを長時間行い、孤立児では1人遊びを中心に短時間ごとに遊びが変化していたことが明らかになった。

幼児の行動特徴と遊びの型の検討から、積極的児と受身的児は、人と関わりながら遊びを発展させたり、遊びを持続させたりする力があることが示唆される。他方、孤立児は、遊びの持続及び発展が少ないことが示唆される。積極的児と孤立児は、自らの興味の方向へ動くという点では共通した行動がみられるが、その後に1人遊びを行うか、仲間を誘って協同遊びを行うかで、遊びの発展性に差異がある。

積極的児は、直接的な自己主張や、自分に注意を向けることによって仲間を集めていくことが特徴的である。小林(1996)も、主張性は仲間集団に参加して、何らかの働きかけを起こすことに関

連しており、主張性の低い幼児はなかなか集団に入ることができないという見解を述べている。また大内ら(2008)は、主張スキルを持たないために積極的に仲間関係に入つていけないことが孤立と関係しやすいと述べている。これらの先行研究と、本調査結果より、自己主張行動が幼児の対人関係において、特に仲間入りの段階で必要なスキルであることが示唆される。一方で、受身的児は他児の働きかけにより、協同遊びや連合遊びといった、他者との関わりが多い遊びに参加していくという遊びの発展が起きやすいことが観察された。小林(1996)も、従属型の子どもは一人遊びが少なく、集団遊びが多いと述べている。それは、受身的児が他児の活動に協調できるあらわれでもある。また、傍観的行動と並行遊びという、関わりを持たない中でも他者を観察したり、側で行動を真似たりするという遊び方が受身的児のみで観察された。ゆえに、他児の様子を観察する、他児を真似る、協調するという社会スキルを用いて遊びに参加していると言える。以上の結果をまとめると図4のようになる。



図4.遊びの発生及び参加の仕方

本研究では、遊びの分類にPartenの分類を用いたが、この分類では1人遊びの内容については言及されていない。Rubin(1989)は、「The Play Observation Scale」において“孤独な遊び”というカテゴリーをさらに“占有”, “建設的”, “予備的”, “機能的”, “劇的”, “ゲーム”的6つに分類している。本研究では、観察対象児が6名と少ないことから1人遊びの詳細な内容分類を行

わなかったが、今後は観察対象児を増やし、1人遊びについても個性を捉えていくことが必要であると考えられる。渡部(2000)は、自ら選択して1人遊びを選んでいる子どもに対し、積極的な対人関係を持たせようとする援助は子どもの自己評価の低下につながる恐れがあると述べており、孤立的な行動をとりやすい子どもについてどのように援助をしていくかは、より詳細な子どもの社会的スキルと対人行動に関する観察が不可欠だと考えられる。

【文献】

- 小林 真(1996). 幼児の社会的認知・非言語主張性と遊び. 上田女子短期大学紀要, 19, 63-73.
- 中澤 潤(2000). 子どもをとりまく人間関係 仲間・友人関係の発達. 堀野 緑・浜口 佳和・宮下 一博(編著) 子どものパーソナリティと社会性の発達. 北大路書房, pp.12-14.
- 大内晶子・櫻井茂男(2008). 幼児の教育非社会的遊びと社会的スキル・問題行動に関する横断的検討. 心理学研究, 56, 97-105.
- Parten, M. B. (1932). Social Participation among pre-school Children. *Abnormal and Social Psychology*. 27(3), 243-269.
- Rubin, K. H. (1989). *The play observation scale Unpublished coding manual*. Department of Psychology, University of Waterloo.
- 渡部玲二郎(2000). 社会的問題解決能力の発達 仲間・友人関係の発達. 堀野 緑・浜口 佳和・宮下 一博(編著) 子どものパーソナリティと社会性の発達. 北大路書房, pp.12-14.